

90
1929-2019



1949年初演「ファウスト博士」より カスペル

日本で一番歴史ある人形劇団ブーク。
今夏、劇団創立90周年記念公演！

宮沢賢治原作

ホッペルと

— おとなの童話 —

象

2019.8.29~9.1

新宿東口 紀伊國屋ホールにて

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）独立行政法人日本芸術文化振興会



文化庁



岩崎書店刊「オツベルと象」より 絵／長谷川義史

— おとなの童話 —

オッペルと象

公演概要

会場：紀伊國屋ホール（JR 新宿駅東口より徒歩5分）
 日時：2019年8月29日（木）19:00
 30日（金）15:00／19:00
 31日（土）15:00
 9月1日（日）11:00／15:00
 チケット：一般6370円、友の会5290円、
 友の会同伴5830円、U-25 3500円
 全指定席 ※未就学児童の方のご入場は出来ません
 ※アンダー25は25歳以下の方が対象です

ものがたり

南の国のある村。農場では傲慢な地主オッペルに虐げられて働く百姓たちがいた。そこに新しい世界を求めて群れを離れた白象がやってくる。初めは働くことを楽しんでしたが、百姓の仲間には入れてもらえず、食事のわらも毎日少なくなっていく。体力も気力も衰えた白象は…。

「働くこと」、「本当の自由」を現代の私たちに問いかける宮沢賢治の作品。

スタッフ

原作／宮沢賢治 脚色・演出／井上幸子 美術／若林由美子 音楽／マリオネット（湯浅 隆・吉田剛士）
 照明／増子顕一（SLS） 音響効果／吉川安志 舞台監督／栗原弘昌 制作／石田伸子

スケジュール

6月

4日 18:00～ 演出会議 東京・西東京市 花小金井プークアトリエにて
 13日 18:00～ 宮澤和樹氏 講演会 東京・新宿 プーク人形劇場にて

みやざわかずき／宮澤賢治の実弟・宮澤清六氏の孫。花巻市の花巻駅近くに、賢治の世界に浸れるスペース（株）林風舎を運営するほか、賢治の精神や作品を後世に正しく伝えるため、講演会や作品展示会など全国で活動中。2015年にリニューアルした宮沢賢治記念館の展示監修も手掛ける。

7月

1日～31日 花小金井プークアトリエにて稽古・美術製作
 ※7月20日～29日 劇団創立90周年記念展示～プーク90年の歩み～ 全労済ホール／スペース・ゼロにて

8月

5日～26日 花小金井プークアトリエにて稽古・美術製作
 28日 紀伊國屋ホールにて舞台稽古
 29日～9月1日「オッペルと象」上演。

随時、見学等も承っています。ご相談ください

●プーク人形劇場

〒151-0053 東京都渋谷区代々木2-12-3
 JR「新宿」駅南口より徒歩7分

●花小金井プークアトリエ・稽古場

〒188-0014 東京都西東京市芝久保町2-21-29
 西武新宿線「花小金井」駅より徒歩12分ほど



お問い合わせ：人形劇団プーク



〒151-0053 東京都渋谷区代々木 2-12-3

電話：03-3370-3371 Fax：03-3370-5120 Eメール：puppet@puk.jp（担当：石田・西本・渡辺・最上）

ホームページ：http://puk.jp/ 公演情報・オンライン予約：https://puk90.localinfo.jp/

『オッペルと象』の歴史

一戦後第1回公演から、記念碑的作品にー

1947年からプークの大切な作品、今あらたに蘇る！！

1947



1948



1953



戦争を経て、終戦後の1947年のプーク第1回試演会で初演、1948年の再建第1回公演、1953年に再演。農民の側に立ち、社会問題や労働問題を取り上げた作品も多い宮沢賢治。その姿勢に共鳴していたプークの劇団員たちは、戦時中、プークが劇団として活動ができなかったとき、いつか彼の作品を人形劇にしたいとよく話していたそうです。戦後、念願叶って初演が決まりましたが、当時GHQの検閲が入り、「死ぬまで働け・・・」という歌詞が検閲に引っかかってしまいました。歌詞ではなく、音楽として、芝居として見て欲しいと説得し、実際の芝居を観て、ついに思いが伝わり認められました。

1962



▲1962年の舞台より（美術／野田牧史）



宮沢賢治没後30年を記念して新たに公演されました。今回演出をつとめる井上幸子は、この時の公演を小学生の時に観たことをよく覚えているそうです。井上にとっても思い入れの強い作品です。お芝居のクライマックス、白象を助けるために仲間の象達が群れをなしてやってくるシーンでは、こちらに押し寄せてくるような象達に驚きと迫力を感じたと話していました。



▲1982年の舞台より (美術/星野毅)

1982年、宮沢賢治没後50年を記念して再び公演されました。1962年の時は手遣いだった人形から、大型からくり人形になり、象の大きさも大きくなりました。観ている子ども達からは「本物の象が舞台にいる！」と驚きの声も多くあがったそうです。子ども劇場・おやこ劇場では高学年例会として、日本各地で公演しました。

また、男性合唱団員を公募し、舞台の上で共演する試みもしました。「合唱と人形の演技のハーモニー」は好評を博し、公演を重ねました。のちにこの時の合唱団は『炎』という名前で長く活動を続けました。

8月25日-28日(6夜) 29日(3夜) 紀伊國屋ホール
入場料：2500円(全席指定) 公演日(4時30分) 2人形劇団77

そして・・・2019!!

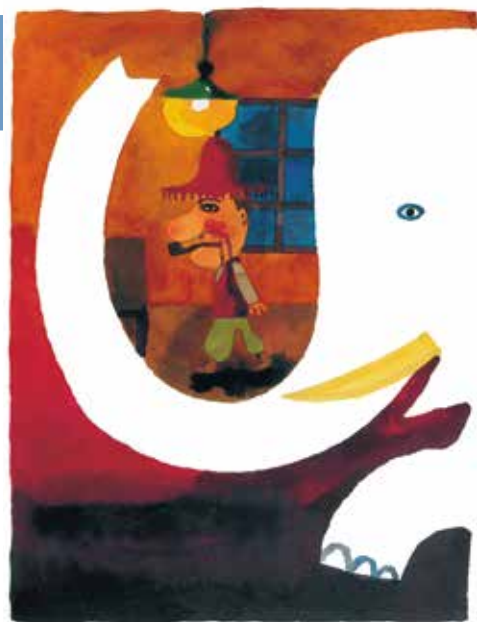
劇団全員で取り組む意欲作!

今回の公演では「怪談牡丹燈籠」、「うかうか三十、ちよろちよ四十」など多くのおとなの人形劇を創り続けてきた井上幸子による脚色・演出でお届けします。

長年培ってきた技法を用いながら、常に新たな人形劇の表現を模索してきた劇団の誇りをかけて、新境地に挑みます。

新しい世界を求めて群れを離れた白象が会った、百姓や傲慢な地主のオッペル。夢と憧れを抱いてやってきた白象が見た現実とは、現代の問題としても生きています。働くこと、その喜び、何を求めて人は生きていくのか、そして本当の自由とは、現代を生きる私たちに問いかけます。

小さな命が大きなエネルギーとなって新たな一歩を踏み出すラストが、観る人にとっても一歩踏み出す勇気になることを願っています。



岩崎書店刊「オッペルと象」より 絵/長谷川義史

「働く」・・・ということ 脚色・演出/井上幸子



1929年からのプークの活動の黎明期と、宮沢賢治の晩年の創作活動の時期とは4年ほど重なり、同時代を生きています。賢治が亡くなった後、それらの作品はプークの舞台創りの大きな位置をしめています。中でも「オッペルと象」は、プークの記念的な年に再演を重ねてきました。

今回は37年ぶりに、脚色・演出共に新作として挑みます。先日の10連休、その間働いている人も多く、世の中は支障なくまわっていました。ふと、支障というのは何だろうと思います。子どもの頃のお正月、お盆などは、どこもお休みでした。ハレの日とケの日がはっきりしていた時代のことです。「進歩=便利さ」の現代は、行き着くところまで行ってしまったような気がします。

そんな時代に宮沢賢治原作の「オッペルと象」を、プーク創立90周年の記念公演に取り上げます。本来、農耕民族である日本人が、土の香りから遠ざかり、多種多様な仕事

についています。そのことの是非を問う芝居ではありませんが、消費社会に飲み込まれ、物に囲まれ、今や捨てることに関心が集まる、それには、多くの人が違和感を覚えているような気がします。

「オッペルと象」の世界では、自然と共に生きる百姓たちの喜びと、オッペルの下で働かされる苦しみを見つめています。白象の望む、大人になること、自立することとは？自由であることとは？・・・

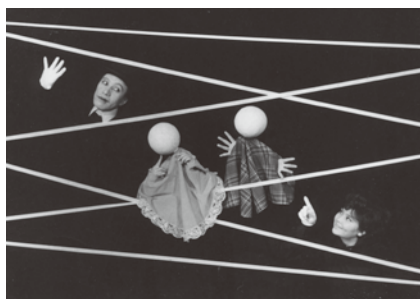
すぐに確固たる答えがわかるわけではありませんが、暗闇の中でも一歩ずつ、わずかな光のさす方向に進んでいきたいと願っています。

90年の活動を通して培われた人形劇の表現は、演劇の世界を広げてきたと自負しています。生きることの喜びや哀しみ、そして人間にとって大切な「笑い」を、これからも失うことのないよう、プークの総力を挙げて人形たちとお届けします。

黒の劇場とは・・・

今回の公演でも取り入れる「黒の劇場」とは、操作者が全く見えなくなり、人形が浮かび上がる技法です。

1958年、劇団の元代表川尻泰司がチェコで観た人形劇に衝撃を受け、照明家と試行錯誤し、1963年に日本初となる「黒の劇場」を用いた公演が実現しました。1965年西村晃との提携公演「チンドン屋でござい」、「プーク黒の劇場」、1967年「怪談 牡丹燈籠」と次々に『黒の劇場』を上演。「プークの黒の劇場を見ないで 今日舞台芸術は語れないー！」のキャッチコピーのように、当時の演劇界に衝撃を与えました。プークの大きな財産である「黒の劇場」を「オッペルと象」で新たに表現します。



◀1966年西村晃提携公演
「チンドン屋でござい」より



1967年「怪談 牡丹燈籠」より
八代目 林家正蔵師匠との共演▶

世界の人形劇界の財産 人形美術家・若林由美子の人形の魅力



▲「金壺親父恋達引」

独自の色彩感覚と造形美学を持ち併せた若林の手から生み出されるその人形は、どこか滑稽で憎めません。最大限にデフォルメされた人形の表情は単純に見え、実は複雑な人間の内面を色濃く反映しています。それが絶妙に見え隠れし、観ているものはいつの間にか親しみを覚え、物語世界に引き寄せられるのです。

今回も若林の真骨頂である布製人形での表現に挑みます。常に新しい素材・デザイン・構造を追求し、人形劇表現の可能性に限界がないことを証明してきた若林。井上演出にとってなくてはならない存在であり、その功績は分野を越えた国内外からの評価も高く、まさに世界の人形劇界の財産と言えます。人形劇表現の更なる高みをめざし、新たな人形へと息を吹き込みます。



▲「金壺親父恋達引」



▲「現代版インソップ『約束・・・』」



▲「うかうか三十、ちよろちよ四十」

小さいものたちのエネルギーあふれる舞台！ 鍵となるのも、子どものポポと、チビ象・・・

原作には登場しない、百姓仲間の子どものポポが、白象と交流を深め物語の鍵をにぎります。ラスト、プークならではの解釈でチビ象に心のうちを見せる白象の姿は、客席のおとなの心にも強く響くことでしょう。

今回は、東大和市にある東大和少年少女合唱団の皆さんにご協力いただき、劇中の音楽を歌っていただくことになりました。子どもたちのエネルギーあふれる声が大きな力となって、舞台に響き渡ります。



「オッペルと象」から全国に広がった歌

1947年の初演から欠かさず歌われている「森のなかまの歌（象たちの歌）」が、今回も重要な役割を担って登場します。

プークの舞台に合わせて作られたこの歌は、その後、劇団を飛び出したごえ運動等によって全国に広がっていきました。この広がりをお語るエピソードがあります。たまたま上演で訪れた九州のある保育園での出来事です。交流会でプークのメンバーがこの歌を歌うと、子どもたちは舞台上で歌われる主旋律ではなく、副旋律を合わせて二部構成での大合唱となり、その迫力に劇団員も圧倒されたということです。

このように、現在、舞台を直接知らない子どもたちにも歌い継がれている様子は、小さな声が大きな波の感動を起こしていく様にも重なって見え、それはまるで長年「オッペルと象」を通してプークが貫いている姿勢をそのままに映し出しているようでもあります。

森のなかまの歌（象たちの歌）

作詞／中江隆介 作曲／関 忠亮

Handwritten musical score for the song "Song of the Forest" (left page). It features two staves, Treble (T.) and Bass (B.), with lyrics in Japanese and rhythmic notation. The score includes various musical notations such as notes, rests, and dynamic markings like *mf* and *mfz*.

Handwritten musical score for the song "Song of the Forest" (right page). It features two staves, Treble (T.) and Bass (B.), with lyrics in Japanese and rhythmic notation. The score includes various musical notations such as notes, rests, and dynamic markings like *mf* and *mfz*.

「マリオネット」音楽が引き起こす化学反応

マンドリンとポルトガルギターデュオ“マリオネット”の奏でる哀愁溢れる音色。注目すべきはその美しさだけではありません。井上演出の舞台とマリオネットの音楽の織りなす世界はなんと形容しがたいのです。相乗効果や融合ともまた違う、観るものが連れて行かれるその先は、異次元、時空を超えた世界。つかみどころのない感覚でありながら、一度体験するとその心をつかんで離さないのは、私たちがそれを心の底から欲しているからでしょう。

その魅力に憑りつかれるファンはあとを絶ちません。こうした化学反応は、全国ツアーで高評価を得、本作も期待の声が続々と集まっています。このような表現を可能にしているのは、根底に流れる確かな技術があつてこそなのは言うまでもありません。マリオネットは断言しています。「今回もまた180度裏切ります！」と。

◀マリオネット（湯浅隆・吉田剛士）



人形劇団プークとは ー舞台とテレビと劇場とー

現代人形劇の確立と発展に寄与したプークの歩み

1971年 **日本初**

現代人形劇専門劇場をオープン！

劇団員自らの手と、子どもたちに良質な文化を届けたい全国からの支援者によって、長年の夢、待望の常設劇場が誕生。日本で初めて現代人形劇の専門劇場「**プーク人形劇場**」が誕生しました。

1947年 **日本初**

両手遣い方式人形劇「**オッペルと象**」

人形劇に対する既成概念を打ち破り、総合芸術としての基盤を確立。検問にきたGHQをうならせる。

1957年 **日本初** 「**青い鳥**」上演権獲得！

戦争を憎む作者のメーテルリンクは、軍国主義だった日本での上演拒絶を続けていたが、戦前からのプークの反戦平和への活動が認められ、親族から友好と許諾の手紙（写真）が送られた。



1953年 **日本初**

総天然色（テクニカラー）長編人形映画「セロ弾きのゴーシュ」で、第1回東南アジア映画祭特別賞受賞。

1960年 **日本初** UNIMA

（国際人形劇連盟）加入

1975年よりプーク人形劇場にて連続公演44年

「**12の月のたき火**」

連続上演記録を更新中！



プークは日本初がいっぱい！！



ほんとだワン！！

1929年創立 **日本で最古** の、

今も活動を続けている現代プロ劇団の一つ！

1933年 **日本初** 両手遣い人形の開発！



幅広い舞台活動

新宿のブーク人形劇場を拠点に、全国で公演をしています。幼稚園・保育園・図書館・小学校・ホールなど、様々な会場に合わせた作品で上演活動を行っています。また、時には海外でも公演を行い、昨年9月にはブルガリアのソフィア人形劇場との共同制作「カモメに飛ぶことを教えたドラ猫の物語」を、日本で上演した後、ブルガリアでも上演しました。日本では人形劇というと小さいこどものためのものというイメージが強いですが、総合芸術である「人形劇」の楽しさを広めるため「おとなのための人形劇」と題し、大人向け人形劇も数多く手がけています。

主な受賞作品一覧抜粋

- 1953年(S28) セロ弾きのゴーシュ(映画) 第1回東南アジア映画祭特別賞
 1962年(S37) 逃げ出したジュピター(No.30) 第16回芸術祭奨励賞
 1964年(S39) オッペルと象(No.34) 昭和38年度児童福祉文化賞(厚生大臣賞)
 人形コンサート 都民劇場賞/日本演協会賞
 1968年(S43) じんじろべえ(No.48) 昭和42年度児童福祉文化賞 モービル児童文化賞(劇団へ)
 1972年(S47) 12の月のたき火(No.59) 昭和46年度児童福祉文化奨励賞
 1976年(S51) 黒の劇場「人形日本風土記」 第4回国際人形劇祭特別賞(ハガリ-ペ-チ)
 1978年(S53) 1ぱつ9のごうけつハンス(No.78) 昭和52年度中央児童福祉審議会推薦
 しちめんちょうおばさんのこどもたち(No.76) 昭和52年度中央児童福祉審議会特別推薦
 1981年(S56) 怪談噺「牡丹燈籠」(No.88) 昭和55年度芸術祭大賞(大衆芸能1部)
 1986年(S62) 第2回O夫人児童演劇賞(竹内とよ子)
 1989年(H1) 怪じゅうが町にやってきた(No.118) 平成元年度東京都優秀児童演劇選定優秀賞
 1990年(H2) うさぎの学校 ブルガリア・バルナゴール・ブルガリア・ブルガリア・ブルガリア部門金賞(「作品賞、演出賞、音楽賞、俳優賞」)
 1993年(H5) あやとじろきちおおかみ(No.128) 平成4年度中央児童福祉審議会児童福祉文化賞
 1996年(H8) JENNIE(ジェニー)(No.136) 平成8年度東京都優秀児童演劇選定優秀賞
 「アーツプラン21」(文化庁芸術創造特別支援事業) 助成団体選定(1996年度~1998年度)
 ちびっこカムのぼうけん(No.142) 平成9年度中央児童福祉審議会推薦
 2000年(H12) ハイジ(No.151) 平成12年度・日本児童演劇協会個人賞<ハイジ=滝本妃呂美>
 2001年(H13) ぼくのおじさん(No.154) 厚生労働省社会保障審議会推薦児童福祉文化財
 2002年(H14) ねぎぼうずのあさたろう(No.157) 厚生労働省社会保障審議会推薦児童福祉文化財
 おれはママじゃない!(No.157) 厚生労働省社会保障審議会特別推薦児童福祉文化財
 2006年(H18) すてきな3にんぐみ~もうひとつの話~(No.164) 厚生労働省社会保障審議会推薦児童福祉文化財
 ダンボールくん(No.164) 厚生労働省社会保障審議会推薦児童福祉文化財
 くまの子ウーフ~ふしぎがいっぱい~(No.164) 厚生労働省社会保障審議会特別推薦児童福祉文化財
 2007年(H19) くまの子ウーフ~ふしぎがいっぱい~(No.164) 平成19年度児童福祉文化賞
 2009年(H21) 第9回倉林誠一郎記念賞(劇団へ)
 2012年(H24) 久留島武彦文化賞団体賞
 第21回O夫人児童青少年演劇賞(井上幸子)、第28回日本舞台芸術家組合賞(長谷詔夫)
 2019年(R1) 第28回O夫人児童青少年演劇賞(小柳田美子)



▲「エルマーのぼうけん」より



▲「怪談 牡丹燈籠」より

テレビの人形劇

スタジオ・ノーヴァ



ブークの映像部門「スタジオ・ノーヴァ」は、テレビの人形劇、CMの人形製作を行っています。

最近ではNHK「ざわざわ森のがんこちゃん」、「新 三銃士」「シャーロックホームズ」などを手がけています。



▲ざわざわ森のがんこちゃん

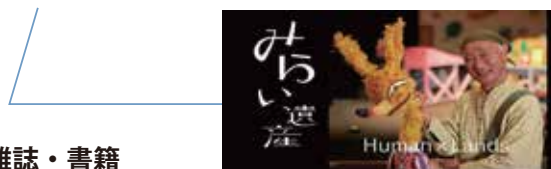


▲「いないいないばあ」よりワンワン

最近のメディア出演

テレビ

- モヤモヤさまぁ〜ず2(テレビ東京) 2015.6.14
 あさいち(NHK) 2015.7.30
 じゅん散歩(テレビ朝日) 2017.5.9
 みらい遺産(BS朝日) 2017.12.19



雑誌・書籍

- くらすことの本(合同会社エプロン社) 2019.3.28
 この本読んで!(博報堂) 2018. 冬号
 月刊MOE(白泉社) 2018.10月号
 おやこデート こどもと楽しむおでかけガイド
 杉浦さやか著(コドモエ BOOKS) 2017.6.21
 GIINZA(マガジンハウス) 2016.4月号

新聞

- 朝日小学生新聞 2018.8.23
 あさひかわ新聞 2018.8.21
 朝日新聞 2018.7.27
 毎日新聞 2018.3.10

様々な方々との親交 抜粋



絵本作家 加古里子さん

“1948年、メーデーの前夜祭で見たプークの舞台にひかれて事ある毎に稽古場を訪れ、プークの皆さんに接する事となった。・・・プーク80年の後半60年は、私が直接間接、教示を受けた得難い年月であった。歩まれた足跡に尊敬と感謝の挨拶を送る次第である。”

2009.1.1 みんなとプーク226号より抜粋

▶観客組織プーク友の会の前身「プー吉クラブ」の初代会長をつとめられた。1948年の出会いから、「だるまちゃん」シリーズの人形劇化、実際にお芝居も観に来てくださり、劇団の節目には暖かい言葉と、すてきな絵を届けてくださいました。



作曲家 富貴晴美さん

“団員の方達のレベルの高さに毎回驚かされ、共に作品を作れて楽しいです。2018年は「エルマーとぼうけん」と大河ドラマ「西郷どん」の作曲ができて幸せな年でした。今後も素晴らしい作品を期待しています。”

2019.1.1 みんなとプーク266号より抜粋

▶「ピンクのドラゴン」「エルマーのぼうけん」と2度にわたり音楽をお願いしました。



黒柳徹子さん

“大人も子どもも、本当に興奮しますね。私もキャーキャーしながら拝見したんですけれども。・・・子どもたちに美しいもの楽しいものを与えようっていう気持ちはずっとお変わらないんでしょうね。”

1989.8.11 徹子の部屋(テレビ朝日)より

▶プークの人形劇もよく観に来てくださいました。

カンパニーデラシネラ主宰

小野寺修二さん



写真/鹿島聖子

“皆さん「エルマー」に対して並々ならない思いがあり、「空を飛ぶこと」についての見通しについてなど大変鋭くつっこまれます。・・・僕自身カンパニーを持っていますが、この情熱ってちょっと想像がつかない感じで、どこの劇団とも違う唯一無二さを感じました。”

2018.7.1 みんなとプーク264号より抜粋

▶2018年「エルマーのぼうけん」で振り付けをお願いしました。

元東京都知事 美濃部亮吉さん

元衆議院議員 市川房枝さん



“プーク人形劇場完成おめでとうございます。日本では初めての人形劇の専門劇場を建設されたことは、まことに喜びにたえません。都民の文化芸術の殿堂、こどもたちの人形劇のお城として益々発展されることをのぞみます。”

日本における新しい人形劇の発展のささえとして、さらに一層のご努力をお願いすると同時に、私もできる限りお力添えしたいと思っております。”

1971.12.15 プーク人形劇場誕生フェスティバルパンフレットより抜粋

▶美濃部都知事のご尽力がなければ、プーク人形劇場は建ちませんでした。写真中央は元参議院議員の市川房枝さん。

「エルマーのぼうけん」原作者 ルース・スタイルス・ガネットさん



“日本で過ごした時間、プークの人々とその協力者のみなさんと共に過ごした時間は、本当に楽しいものでした。”

公演の日、あれほど沢山のエルマーとボリスのファンに会うことができ感激しましたし、三世代にわたってエルマーを愛してくれている人々にも出会えて、なんと嬉しかったことでしょう。人形遣いたち、人形たち、舞台美術、音楽、その全てが魅力的でした。”

2019.1.1 みんなとプーク266号より抜粋

▶2018年に「エルマーのぼうけん」を新たに創るにあたり、劇団のメンバーが原作者のガネットさんに会いに、アメリカのご自宅に伺い、公演にあわせてガネットさんの来日が実現しました。

舞台美術家 朝倉摂さん



“人形といえばプークの人形劇を思い出すくらい、プークの人形劇の歴史は古い。・・・人形は人間の芝居より繊細。リアリズムの中にも飛躍のできる人形劇。装置プラン楽しみなんですよ。”

2009.8「怪談牡丹燈籠」

公演チラシ・パンフレットより抜粋

▶2009年、劇団創立80周年公演「怪談牡丹燈籠」の装置をお願いしました。





お問い合わせ：人形劇団ブーク



〒151-0053 東京都渋谷区代々木 2-12-3

電話：03-3370-3371 Fax：03-3370-5120 Eメール：puppet@puk.jp（担当：石田・西本・渡辺・最上）

ホームページ：<http://puk.jp/> 公演情報・オンライン予約：<https://puk90.localinfo.jp/>